

第1章 紀州のあけぼのと古代人



万葉集と紀伊国

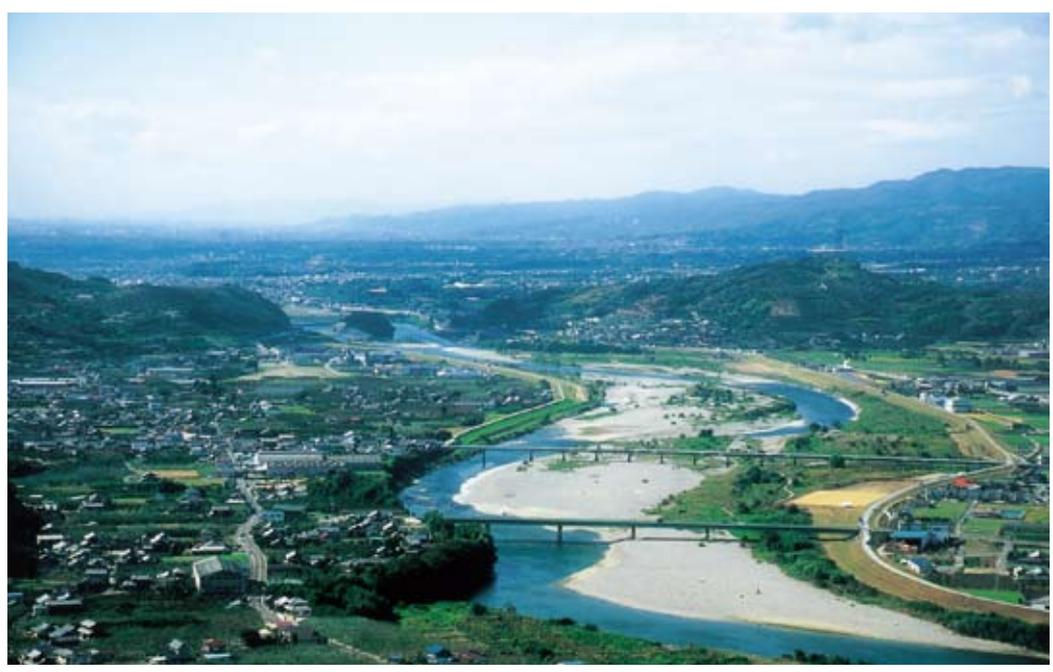
時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

紀伊国への旅

奈良時代の中ごろにまとめられた『万葉集』には、天皇・貴族・農民などの歌が4,500首以上もおさめられています。そのうち、紀伊国に関係のある歌は130首もあります。これらは、ほとんどが7世紀の中ごろから8世紀の中ごろにかけて、飛鳥や奈良の都から紀伊国をおとずれた天皇とそのお供をした貴族たちがよんだ歌です。

このように天皇が紀伊国を訪れたのは、和歌山平野を中心として古墳時代から強い勢力を持っていた豪族、紀氏を従わせるため、または都に住んでいた天皇・貴族たちが、暖かく海の風景がある紀伊国にあこがれていたためであると考えられています。天皇・貴族たちが目指したのは、「牟婁の湯」とよばれた白浜温泉や、美しい風景で有名であった和歌浦でした。人々は、都から紀ノ川に沿って南海道を通り、和歌山平野に着いたあとは、船にも乗りながら海岸沿いに南の白浜温泉へ向かっていたようです。

歌がよまれたのは、その旅の途中で美しい風景が人々の心に残った、真土山(橋本市)、妹山と背山(かつらぎ町)、和歌浦と玉津島(和歌山市)、黒牛瀉と藤白坂(海南市)、糸我峠(有田市)、白崎・由良の崎(由良町)、岩代(みなべ町)、出立(田辺市)などの場所です。このほか、白浜温泉への道すじとは別に、三輪崎・佐野(新宮市)をよんだ歌もあります。



妹山と背山 (かつらぎ町)

紀伊国でよまれた歌

それでは、紀伊国でよまれた有名な歌を、ここで3首紹介します。

人ならば母の愛子ぞあさもよし 紀の川の辺の妹と背の山

(人にたとえると、母の最も愛するふたりの子どものようだ、紀ノ川の川辺にある妹山と背の山は)

『万葉集』には、妹山と背山をよんだ歌が14首おさめられています。二つの山がならぶ様子は、都の近くから見える二上山と似ており、それを思い出して、旅人は遠くまでやってきたという思いにふけり、歌をよんだのでしょう。

和歌の浦に潮満ちくれば潟をなみ 芦辺をさして鶴鳴き渡る

(和歌の浦に潮が満ちてくると干潟がなくなるので、芦のはえているあたりをめざして、鶴が飛んでいくよ)

現在とは違い、たくさんの小さな島がうかんでいた和歌浦は、奈良の都の人にとっては風景の美しい場所として有名でした。この歌は、724(神亀元)年に聖武天皇が和歌浦を訪れた時、付き従った山部赤人がよんだ歌のひとつです。

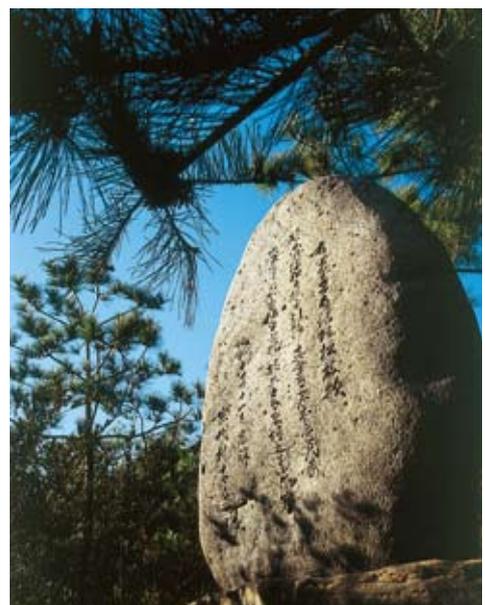
家があれば筥に盛る飯を草枕 旅にしあれば椎の葉に盛る

(都の家にいると、妻が入れてくれたおわんでご飯が食べられるのに、今はとらわれの身の旅なので、ひとりでシイの葉っぱにもって食べなければならない)

658年11月、齊明天皇に対するむほんの疑いでとらえられた有間皇子が、殺される少し前に岩代の浜でよんだ歌のうちのひとつです。罪人になった自分の身のあわれさが、この歌によりこまれています。



和歌浦(和歌山市)



岩代の松と歌碑(みなべ町)